



■2015年3月のマンスリーNEWS 第128号

■コラム

■3月のアークル



皆さんいかがお過ごしでしょうか？いよいよ花粉の季節が本格到来ですね。花粉アレルギーの人（もちろん私も）にとってはつらい季節ですが、これを過ぎると私達の飲料業界はシーズン到来ということになります。そういう意味では、気持ちが引き締まる季節なのです。

さて皆さんもご存知の通り、先月の2/4に飲料業界では激震が走りました。「JT、飲料事業から撤退！」というニュースです。実は私はこのニュースが報道されていたとき、飛行機に乗っていました。空港に到着しメールをみると、JTや関連業者からこのニュースについてのメールが・・・「えっ！？何？」一瞬目を疑いました。「まさか自分の予感が的中するとは！」

実は「もしかしたらJT、飲料事業を止めるのかな？」なんて昨年の秋ぐらいから感じていたのです。昨年年末JTとの忘年会が終ったときに担当部長に「JT、大丈夫だよな？まさか飲料止めるなんて言わないよね」って言っていた自分が思い出されます。

なぜそんな気配を感じてたか？というと、いくつかの理由があります。1つは消費税増税後の売上の落ち込みです。消費税増税で自販機の飲料の価格は値上げされ、自販機の売上は手売り市場に比べかなり落ち込んだのです。JTの大半の売上は自販機です。また、傘下のジャパンビバレッジへの白ベンへの自社製品比率を45%から25%までに下げたのです。飲料メーカーは白ベンオペレーターに対して、自社製品をコラムに投入してもらうのに、コラム料と支払っています。つまりJTがジャパンビバレッジに対してコラム比率を下げたのはコラム料が売上に合わないからの判断だと推測されます。もしくは、ジャパンビバレッジは子会社だから他社からコラム料を貰って儲けてもらったほうが良いと判断したのか、その辺はよくわかりません。どちらにしても大きく売上を落とすことは間違いなく、飲料事業に対しての姿勢に？マークがついたのです。

そしてもう1つの理由は、昨年末辺りからの極端な経費節減です。JT社員の行動がこの経費節減指令(?)から随分様子が変わったのです。例えば、自販機展開に対する費用も今までとはうって変わって消極的になったのです。

これらの様子などから私は「もしかしたら・・・？」なんて感じていたのです。今回そんな嫌な予感が的中してしまいました。ニュースなどでは、これが「業界再編ドミノの始まり」と大々的に報道されましたが、私達飲料業界に携わるほとんどの人々がそう思っているかもしれません。つまり今後シュリンクしていく市場の中で飲料メーカーは淘汰されていくということです。

さてそれでは残れるメーカーはどこになるのでしょうか？これは言わなくても皆さんはもうわかるのではないのでしょうか。

当社がJTさんとお付き合いし始めたのは7年前になります。当時マイナーな飲料メーカーでしたが熱心に担当が当社に通い、今後JTは飲料業界の上位を狙っていくという熱意を感じ、スタートさせた記憶があります。そんなJT社員の頑張りもあり、弊社のJT自販機保有台数は右肩上がりに増えていきました。まさに弊社のここ数年の成長はJT無しでは語れないと言っていいほどだと思います。しかし、それとは裏腹にJT飲料はシェア拡大を目指すあまりに採算度外視といった傾向も見られたのは事実です。自販機を設置したいばかりに、三方良しという商売の大原則が崩れていたのです。

JTは本業である国内でのタバコ事業が減少を見据え、新たな事業を模索し続けてきました。その中の1つであった飲料事業でしたが、大きく開花することはなく撤退となってしまいました。ここで忘れていけないのが子会社であるジャパンビバレッジの存在です。もともと自社製品を拡販を目的に買った日



本最大の自販機オペレーターですが、本業に飲料事業を撤退ということになれば、この子会社を手放すということが考えられます。保有台数24万台、売上で1600億円を越える飲料メーカーをも凌ぐ規模の自販機オペレーターです。

今後はこの巨大自販機オペレーターの嫁入り先で業界地図が大きく変わります。例えばもしサントリーがこの会社を手に入れたとしたら、一気にコカコーラと並ぶ規模になり飲料市場の主導権を手に入れることとなります。コカコーラはそれを阻止したいと考えているでしょうし、その他ビールメーカーも虎視眈々と狙っているのではないのでしょうか。

このように考えると、飲料メーカー再編に伴って自販機オペレーターの再編も進んでいくでしょう。このように大手オペレーターだけでなく、私達のような中小オペレーターも今後いろいろな形でありうるかもしれません。

自販機を取り巻く環境はここ数年で大きく変わりつつあります。私は毎月このコラムを書いているせいかもしれませんが、業界の環境変化を敏感に感じるのです。10年後に自販機市場はどうなってしまうのか？考えると恐ろしくなります。正直、本当に必要とされている自販機だけ残すとしたら、日本全体で何台の自販機が不要となるのでしょうか？

このような現象が地方では既に現れてきています。飲料メーカーは直販で自販機オペレーションをやっていたのを地方ではここ数年で全て地場オペレーターへフォローを移管しました。メーカー直で自販機フォローは地方では採算が合わないのです。もし、自販機売上が今後もっと下がってしまったら、メーカーから地場オペレーターへのフォロー移管さえまならいケースがでてくることもあるかもしれません。

さて弊社の2月期はなんとか昨年をキープ出来ました。しかし東高西低（海老名（営）が良くて小田原（営）が悪い）が続いてる状況です。小田原（営）が苦戦しているのにはいろいろな要因があると思われませんが、現場のメンバー達は一生懸命頑張っています。



現在はホットコラムを減らしコールドコラムを増やす作業が中心になっていますが、それと同時に賞味期限切れのチェックをしています。この時期は夏から商品で自販機庫内で残ってしまった夏商品の賞味期限切れが出やすい時期になります。毎年、賞味期限切れを出さないように工夫を重ねていますが、必ず出てきてしまいます。賞味期限切れ対策としては、自販機への投入本数がポイントとなるのですが、これを恐れすぎて投入本数を少なく設定すると、売り切れを起こしやすくなり、売上のチャンスロスに繋がるということにもなってしまいます。つまりこの問題が2つの矛盾する点を解決していかなければならないので、非常に難しい問題なのです。

また、弊社では今後の問題としてJT自販機について対処していかなければなりません。他社メーカーを扱うのか、既存メーカーで対応していくのか、現状でははっきりしたことは言えませんが、どうなろうと弊社の「**自販機をしっかりと管理する**」事は変わりません。

今回、業界にとっても弊社にとってもJT飲料が撤退というのは、大きな激震であったことは間違いありませんが、このようナリスクは裏を返すと大きなチャンスとも言えるのです。

私達は、今回の事をチャンスと捉え今後この業界でしっかりとビジネスしていこうと新たな決意をしています。「**世の中は一寸先は闇**」とはよく言ったもので、今回の出来事は本当にそれを痛感させられる事でした。

今後もアークルは自販機オペレーターとしてしっかりとビジネスを続けていきますので皆様よろしくお願ひします。

■コラム

■先月の売れ筋商品

DYDO売れ筋ベスト5		SUNTORY売れ筋ベスト5		JT売れ筋ベスト5	
1位	新ダイドーブレンドコーヒー	1位	ボス真夜中の微糖	1位	グアテマラ185缶

2位	細缶Mコーヒー	2位	ボス贅沢微糖	2位	微糖スペシャル
3位	新ブレンド微糖	3位	ボススーパーブレンド	3位	爽快ビタミン500缶
4位	Nデミタスコーヒー	4位	ボスレインボーマウンテン	4位	クリーミーカフェHOT
5位	無糖樽コーヒー	5位	ボス無糖ブラック	5位	ルーツインパクトブラック

■コラム

■世界中で低金利時代がやってきた

カンボジアで銀行口座開設にチャレンジ！



今、世界中で通貨戦争が行われている！

皆さんこれ、ピンとききますか？まさにアベノミクスもその1つでしょう。先頃、ECB（ヨーロッパ中央銀行）が金融緩和に踏み切りました。ドイツではマイナス金利になっているとか。スウェーデンクローナもマイナス金利になっているとか。マイナス金利って皆さん想像がつかますか？銀行預金をしていたら、金利がもらえるどころか、手数料を取られてしまうのです。

それほど、世界の国々はお金を刷りたがっていて、自国の通貨を安くしようとしています。

自国通貨が安くなれば、自国製品が良く売れ景気がよくなります。また債券の金利が下がれば、お金は金利（配当）が高い株やリートに流れます。

今、日本円で銀行に貯金している私達は0.025%ですから100万貯金して1年後には250円の金利しかもらえません。ましてやアベノミクスが目指すインフレ率2%を達成したとしたら完全にマイナス金利と同じことになってしまいます。もっと言うなら、ドルに比べて円はここ数年で20%以上下落していますから、円を普通預金で持つほどバカらしいことはないということになってしまいます。

まさに堀古英司氏（先月号マンスリー参照）の言う、「何もしないリスク」ということになります。長らく続いたデフレ時代が日本人をリスクの取れない人々にしてしまったのかもしれない。

さてそこで今回は私が自らカンボジアに訪問して実際に定期預金口座を開設してきたレポートをいたします。カンボジアの定期預金金利は1年物でだいたい6%前後で、通貨は米ドルになります。

ここで、「うん？おかしいな？」と皆さん思うのではないのでしょうか？アメリカドルの金利はいまだ低いままで、日本の銀行で米ドルの定期預金もしても0.5%ぐらいがいいところです。

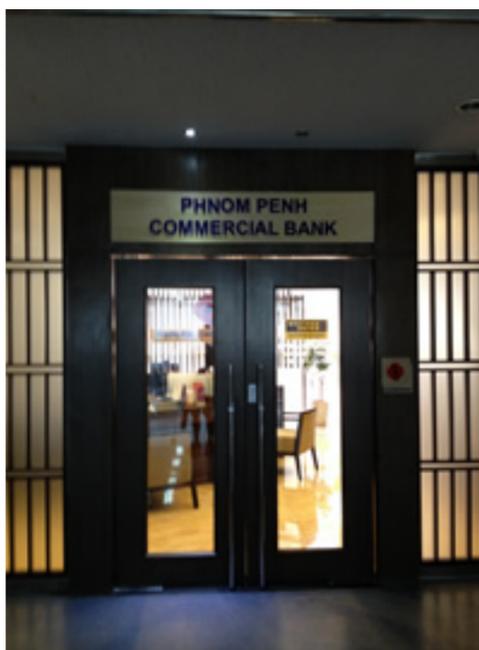
それじゃ、なぜカンボジアの銀行は自国通貨でない米ドルでそんなに高い金利を出すことができるのでしょうか？理由としては、ソブリンリスク（国家に対する“信用”リスク）が先進国のそれと比較して圧倒的に高く、グローバルな為替市場ではなく国内の事情によって金利が決まっているからなのです。

カンボジアでは、大手と言われる銀行であっても格付すらついていないことが多いので、機関投資家やヘッジファンドの投資基準を満たすことができず、海外から資金を集めることができません。

カンボジア国内に目を向けても、自国通貨であるリエルすら信用していない国民達は当然のように銀行のことも信用していないため、ちょっとやそっとでは虎の子の資金をカンボジアの銀行に預けるようなことはしません。

結果、市場原理が働きカンボジアの銀行は預金をしてもらうために金利を高くします。

普通なら自国通貨であるリエル預金の金利を上げれば良いのですが、リエルよりも米ドルの方が圧倒的に流通してしまっているため米ドル預金の金利も上げるしかなく、1年



もの6.00%や5年もの7.30%とい歪んだ金利が実現しているのです。

もちろんカンボジアの銀行には日本のような預金保険制度がありませんから、万が一銀行が破綻した場合は泣き寝入りするしかありません。ここにも自然の法則が存在します。金利（配当）が高ければ同じだけのリスクが存在するという事です。

今回訪問したプノンペン商業銀行（PPCB）で、金利は1年物の定期で6%の金利がつきます。その他、高金利を唄うカンボジアの銀行はたくさんあります。有名なところではアクレダ銀行、カナディア銀行、AZN ロイヤル銀行などがあります。

PPCBの場合、日本人をターゲットにしているということもあり日本人デスクを設けています。英語が出来ない人でもここなら安心です。

場所はプノンペンの街のど真ん中にある、プノンペンタワーというビルでまさにプノンペンで唯一の商業ビルの2Fにあります。

とてもきれいで豪華なオフィスで、顧客専用の部屋に通され手続きを行います。時間にして30分程度で全て完了します。必要な書類はパスポートだけという手軽さです。



内容を簡単にまとめてみました。

- ・ 最低預け入れ額 \$ 100
- ・ 金利 6.0% (1年)

6.2% (2年)

6.7% (3年)

7.0% (4年)

7.3% (5年)

- ・ 税金 6.0% (居住者)

14% (非居住者)

1年定期にして、満期後自動的に元本と金利をそのまま継続させることも可能で、そうしておけば複利で増やしていくことが出来ます。

しかし、ずーと最初の金利は保証されません。



カンボジアでこの銀行に住宅ローンを借りた場合は約10%ぐらいだそうで、発展している国の資金ニーズの高さが伺えます。私は今回、自分の肌で感じたことはカンボジアに対するソブリンリスクというよりも、これから発展していこうとする中での高金利（資金ニーズ）で、新興国をリスクと捉えるのかチャンスと捉えるのかの判断と感じました。

■コラム

■癒し&グルメの街 プノンペン

お金の話はこれぐらいにして・・・プノンペンの街について紹介しましょう。

プノンペンはアジアの穴場！！

キーワードは安い・美味しい・癒される！！

ホテルはブデックホテル。レストランは世界各国の料理が格安で食べれる。今回行ったレストランを紹介します。

ブデックホテル (LaRose Suitst)



エントランス



レストラン



プールサイド

激ウマ ピザ (Piccora Italia)



外国人で夜は大賑わい！

ハンバーガーが美味しい (Brooklyn pizza&bistro)



高級フレンチ (Topaz)



ランチコースがお得！ \$ 20です。日本で食べたらいくらになるんだ！？

高級中華（老地方海鮮大酒楼）



リーズナブルな中華（北京菜館）



プノンペンには激安の屋台メシから高級フレンチ（安い）まで数多くレストランがあります。もちろん日本食も。ツーリスト用のガイドブックもありますので気軽に楽しむことができます。

■コラム

■アークルの人達ブログ・絶好調連載中です！

ただいまブログは6名が更新中です。

- ・ [小田原営業所所長日記](#)
- ・ [熱血小田原チーフの日記](#)
- ・ [販促課マネージャーの日記](#)
- ・ [海老名の所長ブログ](#)
- ・ [開発道](#)
- ・ [開発チーフの日記](#)



ベトナムハノイへ 次回楽しみに

今月は以上です。又、来月号も宜しくお願いします。

■2015年度のマンスリーNEWS

➔	2015.2	アークル	マンスリーNEWS
➔	2015.1	アークル	マンスリーNEWS

■マンスリーNEWS アーカイブ

➔	最新	マンスリーNEWSトップページ
➔	2014年度	2014年のマンスリーNEWSアーカイブ
➔	2013年度	2013年のマンスリーNEWSアーカイブ
➔	2012年度	2012年のマンスリーNEWSアーカイブ
➔	2011年度	2011年のマンスリーNEWSアーカイブ

→	2010年度	2010年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	2009年度	2009年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	2008年度	2008年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	2007年度	2007年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	2006年度	2006年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	2005年度	2005年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	2004年度	2004年のマンスリーNEWSアーカイブ
→	番外編	マンスリーレポート番外編

© Copyright 2008 ARUCRU co.,ltd All rights reserved.

